

1. 経歴¹

1959年6月18日 アルジェリアのシディ・ベル・アッベス（Sidi Bel Abbès）市にて生まれる。独立戦争（1954-1962年）のため、幼少期に一家はフランス本国へと帰還。「私が子供の頃から現在に至るまで、「フランスのアルジェリア」がもたらす記憶や軋轢の複雑さについて、家族は完全に沈黙していました。母を通じて、私は失われた楽園の神話を生きていました。あまりにも苦痛で、あまりにも明白な何か。」「生まれ故郷をもたないで、自分の生まれ故郷がいわば奪い取られていると考えながら生きていくのはとても奇妙なことです。」

1975年 フランス中部のリモージュ市のゲイ＝リュサック高校（Lycée Gay-Lussac）三年生のときに、哲学の道に進むことを決意。教師 Monique Nigues によって、「自分の視野を広げる方法を学び、冴えない地方の小都市を想像上の地理に変える方法を学ぶ。つまり、文字通りの意味で（哲学によって、旅立ちたいという欲望を得る）、隠喩的な意味で（哲学者の著作を読解することで知的な地理を開拓する）変える方法を学ぶ」。

1977年 リモージュを離れてパリに移転し、アンリ四世高校の準備学級に入学。「実に素晴らしい教師」 Pierre Jacerme のもとでヘーゲルとハイデガーを学ぶ。Pierre Jacerme はジャン・ボーフレのもとでハイデガーを学び、アンリ四世高校の準備学級で長年教鞭を執っていた人物。

1979年 高等師範学校フォントネイ・オ・ローズ校（École normale supérieure de Fontenay-aux-Roses）に入学。

1982年 大学生のとき、日本を旅行。愛読書デュラス『ヒロシマ・モナムール』にならって広島まで旅する。閉所恐怖症だったマラブーは自由への出口を探するという考え方をしがちだったが、決定的な経験をする。ある禅寺で夥しい数の仏像で覆われた壁に感銘を受け、「壁がみずからを否定する光景を目の当たりにし」、可塑性概念のひとつの着想を得る。

1984年 DEA 課程（専門研究課程）でもヘーゲル研究を継続しようとするが、指導教官ジャック・ブーヴレスから「偉大な哲学者」デリダの話聞く。「彼がヘーゲルについて書いたものを読まなければならないだろう。『吊鐘』を」。マラブーは当時、「デリダの名前はもちろん知っていたが、彼が何をしているのかは正確には知らなかった」。10月、カルチエラタンのジベール書店で『吊鐘』を手にとって衝撃を受ける。

1986年 デリダと出会い、指導教授を依頼する。「私のなかの何かが、家族以外の別の「ピエ・ノール」との出会いをついに待っていたかのようなようでした。」「人生のなかでもっとも美しい贈り物のひとつ」。デリダから学んだものは、「大胆さ、なぜ自分が制度を憎んでいるのかを理解できたこと、厳密さ、私の「フランス性」の脱中心化、アメリカの知的生活への道が開かれたこと、国際哲学コレージュへの参加、彼の談話や講演、著作——信じられないほど生産的で特異な仕事だと思ったし、

¹ 経歴については、以下の資料等を参照。« Interview with Catherine Malabou », July 26, 2017, <http://figureground.org/interview-with-catherine-malabou/>. « Murée de l'être », *Vocation philosophique*, Bayard, 2004.

いまでもそう思っている——に対してたえず賞賛の念をはぐくんだこと」。

1989～95年 国際哲学コレージュにてプログラム・ディレクターとして活動。プログラム名は「読むこととは何か〔Qu'est-ce que lire ?〕」で、ヘーゲルにおける読解の問いを記憶や死の問題系と関連づけて探究するもの。当時の院長はリオタールで、国際哲学コレージュではランズマンの映画『シヨアー』に関する議論が頻繁になされた。

1990年 「ルヴュ・フィロゾフィック」誌のデリダ特集号を編纂（日本語訳は『デリダと肯定の思考』）。

1994年12月 ジャック・デリダの指導の下で書き上げた博士論文「ヘーゲルの未来——可塑性、時間性、弁証法」で博士号を取得。審査委員会はバルナール・ブルジョワを審査員長として、ドゥニーズ・スーシュ＝ダグ、ジャック・デリダ、ジャン＝フランソワ・クルティエヌ、ジャン＝リュック・マリオン。

1995年 パリ第10大学准教授に着任。2011年まで在籍。

1996年 『ヘーゲルの未来——可塑性、時間性、弁証法』刊行

1998年 『ヘーゲルの未来』に対するデリダの長大な書評「複数の別離の時間——マラブー（が読解する）ヘーゲル（が読解する）ハイデガー」公刊。

1999年 デリダとの共著『側道』を刊行。世界中を旅するデリダとの往復書簡と引用断片からなる、哲学と／の旅に関する著作。10月、フランス・トゥルコアン・フレノワ現代芸術国立スタジオ（Fresnoy-Studio national des arts contemporains）にてシンポジウム「可塑性」を主催。哲学、神経生物学、美術の専門家との協同研究。

2002年 ジュディス・バトラーの初の仏訳書『権力の心的な生』の序文を執筆。カリフォルニア大学アーヴァイン校でのシンポジウム「デリダ／ドゥルーズ 精神分析、領土性、政治」にデリダとともに招聘され、発表「多形性はけっして幼年期を歪めないだろう」。アメリカでの活動の基盤が形成され始める。

2003年 『ハイデガー変換』『エクリチュールの暮れ方の可塑性』にて、ストラスブール大学で教授資格審査（Habilitation）に合格。

2004年10月 デリダ死去。追悼文「ジャック・デリダの死」——「けっして「死なるもの」などない、死のなかにはひとつ以上の死がある。この奇妙な肯定こそ、間違いなく、ジャック・デリダの思想のなかでもっとも根源的でもっとも重要なもののひとつである。」「ジャック・デリダ、無限にかけえのない人物、どうすればこのことを別の表現で言い表わすことができようか。」これ以後、明示的に、デリダの思想から離反し始め、脳科学と哲学の横断的研究に向かう。『ハイデガー変換』『エクリチュールの暮れ方の可塑性』を刊行。

2005年7月 日本に三週間滞在し、東京と京都で五つの講演を実施。「私たちの脳をどうするか」「哲学の使命」「世界史と喪の可塑性」「資本主義批判者ハイデガー——エコノミーという隠喩の運命」「二つのメタモルフォーズのあいだのハイデガー」。

2007年 ジュディス・バトラーの招きで、カリフォルニア大学バークレイ校で客員教授として滞在。はじめての長期間のアメリカ滞在。『新たなる傷つきし者——現代の心的外傷を考える』を刊行。

2009年 『偶発事存在論』、論集『真ん中の部屋』『差異の変換』を刊行。医師グザヴィエ・エマニュエリ（人道的医療活動「国境なき医師団」「SAMU ソーシャル」の設立者）との共著『大いなる排

除』を刊行。

2010年 バトラーとの共著『私の身体であれ』を刊行。

2011年 ロンドンのキングストン大学教授となる。

2013年 エイドリアン・ジョンストンとの共著『自己と情動的な生——哲学、精神分析、脳科学』を刊行。

2014年 『明日の前に』を刊行。

2017年 カリフォルニア大学バークレイ校比較文学科の教授を兼任し始める。

2018年 『インテリジェンスの変貌』を刊行。

2020年 『抹消された快楽——クリトリスと思考』を刊行。2017年頃から長期の研究プロジェクト「哲学とアナーキズム」を継続中。

2. 「可塑性」概念の発見と形成

Cf. « Plasticité », *Vocabulaire Européen des Philosophies*, dir. par Barbara Cassin, Le Seuil & Le Robert, Paris, 2004, pp. 958-960. 『ヘーゲルの未来』、31-32頁。

形の贈与と受容

plasticité/Plastizität (可塑性) : 18世紀末から19世紀初めにドイツ語とフランス語で用いられるようになった言葉。

ギリシア語 *plassein* (造形する) を語源とする二つの言葉から派生

1) 実詞 *plastique/Plastik* (彫塑) : 形の錬成 (たとえば、彫刻)。

2) 形容詞 *plastique/plastisch* (可塑的な) : 形の変化を受け入れること (たとえば、蜜蝋や粘土)、形を与えること (たとえば、造形術や形成手術)。

malléabilité/Bildsamkeit (可鍛性) : 衝撃や圧力で破断されることなく変形する固体の性質 (金属材料)。鍛造する性質。→形の受容

formation/Einbildung, information/Durchbildung (形成) : 形を与えることで作り上げること。→形の贈与

→「可塑性」がもつ二重性 : 形を与えることと受けること、形の贈与と受容

教育や養成 (例: 子供の適応能力)、適応や進化 (例: 脳の可塑性、生物の環境適応能力 [*vertu plastique*])

可塑性の第三の意味

20世紀における *plastique* の新しい意味

1913年～ プラスチック (合成樹脂) 1962年～ プラスティック爆弾

みずからが生み出し、みずからに与える形の爆破と消滅。

第一・第二の意味 (形の贈与と受容) と第三の意味 (形の爆破) の連関の妥当性?

主体性の核

可塑性 ≠ 堅固さ、固定性、硬直性

≠ polymorphe (多形性)、protéiforme (変幻自在) Cf. リオタール『文の抗争』

あらゆる他者を吸収し我有化する変幻自在な自己ではなく、自己形成の途上にあり、不測の事態(未来)に開かれている自己。

融通の利かない、不服従の主体性

「一度形成されるとその祖形を再び見出すことができない大理石彫刻のように、形態を保存するものこそが可塑的である。したがって、「可塑的」とは変形作用に抵抗しながら譲歩することを意味する。」(『ヘーゲルの未来』、32頁)

3. 弁証法と時間性の可塑性

『ヘーゲルの未来——可塑性・時間性・弁証法』(L'Avenir de Hegel. Plasticité, temporalité, dialectique, Vrin, 1994. 西山雄二訳、未来社、2005年)

ヘーゲルにおける可塑的な主体

「哲学的論述は、ひとつの命題の諸部分〔主語と述語〕が普通の仕方に関係し合うのを厳密に排除するようなものであるときに、はじめて可塑的なものに行き着くだろう。」(ヘーゲル『精神現象学』序文)

述語命題：偶有性を外部から受け取る主語

思弁的命題：実体が自分自身の主語であり同時に述語であるような自己規定のプロセス。実体が自己否定の運動によって、みずからを主体として措定する。(実体=主体)

ヘーゲルにおける未来の不在？

- 1) アレクサンドル・コジエーブ「歴史の終わり」：「絶対知」に到達したヘーゲルの精神はあらゆる否定性を喪失し、時間性そのものを無化してしまう。
- 2) ハイデガー：ヘーゲルが想定する時間は「通俗的時間」にすぎず、「平板化された世界時間」しか考慮していない点で「根源的時間性」(未来への先駆的決意性による時間の脱自)を解明していない。

人間／神／哲学者

1) 人間

習慣：アリストテレスの『靈魂論』における「受動的ヌース」。何かを受けること／何かを生み出すことという二重の作用の根源的統一がなされ、人間の出現を可能にする位相。とりわけ、習慣の取得によって、未来を保留した存在様態が確保され、将来を見通すための時間性が開かれる。

2) 神

ケノーシス(無化)：キリストが受肉によってみずからの神性を放棄したという、神と人間の統一の神秘。無限なる神が主体的に自己否定をおこなうことで、みずからを有限性に曝す。ヘーゲルによれば、神の無化は近代的主体性に時間形式を与え、その見返りとして、みずからの疎外化を受け取る。

3) 哲学者

絶対知：弁証法的止揚の発展が絶対知に到達し、精神はみずからの長途に回顧的な眼差しを向ける。絶対知に至った精神の「単純化」は、習慣（偶有性の本質的生成）と無化（本質の偶有的生成）の二重のエコノミーと連動している。マラブーによれば、絶対知において止揚の行程がさらに止揚され（止揚の止揚）、「通俗的時間」が振り払われ、自己変貌の過程として新たに作動し始める。

書評

「ヘーゲルの未来は、まさに可塑性の展開に掛かっている。しかし、可塑性という概念が、ヘーゲルの中から発掘されたというよりは、マラブーの自己流の存在概念こそ、可塑性なのである。可塑性とは「マラブーがベルクソンの哲学を唯脳論化したもの」というのが、その実態なのではないだろうか。」（加藤尚武「「可塑性」概念の有効性」、『未来』、第469号、2005年10月号、25頁）

「ただし、マラブーは時間一般が「可塑性」を備えていると解釈しているが、本稿で見たように、自然の時間は可塑的であるとはいえない。」（飯泉佑介「ヘーゲル哲学の時間論——「時間の抹消」の解明に向けて」、『21世紀研究』第9号、2018年3月、84頁）

デリダの長大な書評「複数の別離の時間——マラブー（が読解する）ヘーゲル（が読解する）ハイデガー」。《Le temps des adieux Heidegger (lu par) Hegel (lu par) Malabou », *Revue Philosophique*, No 1, janvier-mars 1998, PUF.

可塑性における死の契機や喪の作業をめぐる批判

「生物それ自体の読解について述べられていることを、死に即しても語るべきではないだろうか。」ヘーゲルの主体性が可塑的な自己運動を続けるとして、そこには非可塑的、非弁証法的なものは本当に残らないのか。真の未来とは、主体の形成や予期、喪をめぐるあらゆるプロセスに対する非弁証法的な別離ではないのか。

複数の別離の識別不可能性

- ① 将来の再会が既に計算された「さようなら (au-revoir)」：自分が別れを告げるものをさらに止揚し、内面化し、離別する当のものに対する喪の作業を遂行する。
- ② 再会が確約されていない、永訣の挨拶にも似た「さらば (adieu)」：可塑的な運動の中断を引き起こす別離、救済のない挨拶。

デリダへの応答の模索

『側道』：デリダの著作におけるカタストロフの問い

『真ん中の部屋』第一部に収録されたヘーゲル論：ヘーゲル哲学における否定性の所在の探究

「可塑性のモチーフに取り組みながら確認されたのだが、私は脱構築的な挙措から出発したものの実際はこの挙措から遠ざかっていった。期待に反して、可塑性に固執することによって、弁証法の機能不全や分離——私が分裂的論理と名づけてしまったもの——は発見されなかった。むしろ、逆説的にも、読解の道程を経た果てに弁証法の潜勢力が確認されたのである。あたかも可塑性がヘーゲルのテキストの自己防御や自己免疫をなしているかのようである。」（『真ん中の部屋』、109頁）

「弁証法的に脱構築されたテキストは絶対に、純然たる自己同等性には戻らない。弁証法と脱構築

はある根本的な点で一致する。つまり、あらゆる限界はそれ自身を侵犯する可能性をみずからうちに抱えているという点である。」(111 頁)

4. 存在の可塑性

『ハイデガー変換——哲学におけるファンタスティックなものについて』(Le Change Heidegger. Du fantastique en philosophie, Léo Scheer, 2004)

変換の三幅対

ハイデガーによれば、ヘーゲルは未来のない「通俗的時間」を完成させ、〈存在〉を不動性として形而上学的に理解した哲学者。

それでは、ハイデガーはどのような変貌(メタモルフォーズ)の概念を思考し、〈存在〉といかに関係づけたのか。

Wandel - Wandlung - Verwandlung (changement-transformation-métamorphose / 変化-変形-変貌) という「変換の三幅対(W, W, V)」の内在的運動こそがハイデガーの〈存在〉の実相²。

Wandel - Wandlung - Verwandlung は日常的な意味で用いられている目立たない語彙。

≠変化に関する伝統的な鍵語: Änderung (変更), Veränderung (変化), Werden (生成)

≠ハイデガーにおいて時代の転回を指し示す語彙: Kehre (転回), das Zuspiel (投げ送り), Sprung (跳躍)

この変換装置を介して、ハイデガーにおける形而上学、人間、神、言葉、歴史の自己変容運動、そしてハイデガー自身の変貌が解明される。

ファンタスティックなもの=あらゆる変換や変化、変形を可能にする存在論的変容への接近

「可視性と現出の様式であるファンタスティックなものは、この場合、存在-存在論的な変容——人間、神、言葉——の現象性を指し示す。この現象性は存在の根源的な変化可能性の覆いを取り去り、同時に、存在がおそらく何ものでもないこと——その変化可能性でしかないことを明らかにする。」

(Le Change Heidegger, p. 22.)

「ハイデガーの思索の方針(形而上学の超克、時間、歴史、出来事)と、ほとんど名づけられえない動的な内奥(W, W, V)のあいだの距離や隔たり」(p. 23)を、概念とは異なる方法で想像する技法。

伝統的哲学(プラトン、ヘーゲル、ニーチェ)、現代哲学(マリオン、ドゥルーズ、デリダ)、文学

² タイトルの Le Change Heidegger はドイツ語には(もちろん日本語にも) 翻訳不可能な多義性を帯びている。フランス語の名詞 le change は「両替、為替」の意味(「変化、変動」は changement)。マラブーは名詞 le change と changer (変える、交換する)の意味合いを込めて、複数の解釈の余地を残している。①「ハイデガーの変換」。変換や変化に関するハイデガーの思索のこと。②「ハイデガーと名づけられた変換」。固有名と名詞が直接結びつくことで、「ガイガー・カウンター」のように、製品名の響きがする。「ハイデガー変換」は独自の変化に与えられた名となる。③「ハイデガーを変化させる機器」。動詞 changer の含意を込めてハイデガーを変形する装置と解することができる。日本語訳では交換と変化の双方の含意を込めて「変換」の語を選び、製品名のように「ハイデガー変換」と暫定的に訳すことにした。後出する著作タイトル Changer de différence も、間接他動詞 changer de に「～を替える」の意味があり、「差異の変換」と訳した。

(オウィディウス、カフカ、サルトル) の参照。

存在論的メタモルフォーズの思潮

ナンシー『世界の創造あるいは世界化』(2002年)³、ボヤン・マンチェフ『世界の他化』(2009年)、「デカルト通り」誌の特集「メタモルフォーズ」(マンチェフ編、第64号、2009年)、エマヌエーレ・コッチャ『メタモルフォーズ』(2020年)

5. 可塑性の自伝的宣言

『エクリチュールの暮れ方の可塑性——弁証法、破壊、脱構築』(*La plasticité au soir de l'écriture. Dialectique, destruction, déconstruction*, Léo Scheer, 2005)

弁証法／破壊／脱構築

教授資格審査の副論文として執筆された自伝的マニフェストで、冒頭に「ジャック・デリダのために [Pour Jacques Derrida]」という献辞。

マラブーが批判的に継承してきたヘーゲルの弁証法、ハイデガーの破壊、デリダの脱構築。

これら三つの論理を相互に変貌させる「運動図式」が、書記的なもの [le graphique] と可塑的なもの、エクリチュールと形が交錯する「可塑性」として示される。

現代哲学において軽視されてきた形の思考

レヴィナス：「痕跡」は形に還元されえず、〈他者〉は形を貫通する。

デリダ：エクリチュール、痕跡、差延

「変形の意義、たとえば変貌 (メタモルフォーズ) による他なるものへの生成の意義は陰に追いやられたままである。「差延」は形の変化としてけっして特徴づけられない。」(*La plasticité au soir de l'écriture*, p. 90)

形 (エイドスやモルフェー) の思考は形而上学の頸を脱していないとされる。(デリダ「形式と意義作用」、『エクリチュールと差異』)

「私は危険を冒して主張したい。形と現前は混同されえない、少なくとも、つねに混同されるわけではない。現前に対する形の超過——これこそが形の伝統的な概念の変貌に対応する——とはおそらく [ハイデガーの] 破壊だけでなく、伝統そのものの脱構築を注釈する上での資源であるのだ。」(p. 94)

エクリチュールの思考から可塑性の思考へ

「私は引き続き明らかにしたいと思う。可塑性は痕跡を配置し、消去することで、とはいえ痕跡を

³ ナンシーとマラブーの実存の変容に関しては、伊藤潤一郎「存在論的差異の実在としての実存——マラブーのナンシー論から存在論的共同体論へ」、『立命館大学人文科学研究所紀要』第118号、213-235頁を参照されたい。

硬直化することなく形成すること、を。この意味で、可塑性がエクリチュールの暮れ方にまさに現れるように。[・・・] 可塑性とはエクリチュールの止揚であり、喪であり、メランコリーであり、離別であり、変貌である。」(p. 114)

可塑性は脱構築された現実世界を体系的に考えるための新たな思考様式となる。社会・経済的な編成における、遺伝学や脳生理学における形の生成・変形を考察する手法として可塑性は決定的である。「もはやエクリチュールの事例ではない。」(p. 108) 「DNA がもはや何も書かないところで可塑性が形をなす。」(p. 112)

6. 脳の可塑性

『私たちの脳をどうするか』(Que faire de notre cerveau ?, Bayard, 2004. 桑田光平・増田文一朗訳、春秋社、二〇〇五年)

可塑性／柔軟性

可塑性はニューロサイエンスを統括する概念：中枢神経組織、神経、ニューロン（神経細胞）、シナプス（結合部）の可塑性。

脳細胞組織は中央集中的で厳格な指令拠点などではなく、みずから発達・調整・修復を繰り返すきわめて可塑的なシステム。

「脳を意識することが無条件的に資本主義の精神と一致しないようにするためにはどうすればよいのか？ 今日、可塑性はその真の意味では隠蔽されてしまっており、実際には、その見かけだけの友である柔軟性によってたえず置き換えられている。[・・・] 柔軟性とは可塑性のイデオロギー的変貌なのだ。柔軟性は、同時に可塑性の仮面であり、乗っ取りであり、没収である。」(『私たちの脳をどうするか』、22頁)

「柔軟性 *flexibilité*」：グローバルな市場主義、新自由主義の趨勢が推奨する労働主体の従順な態度。
≠ 「可塑性」：一度習得した偶有性が本質化されて、外的圧力に対する抵抗の源泉となる。

生物学的オルター・グローバリズムに向けて

「[21世紀初頭のグローバル資本主義とテロリズムの硬直したスペクタクルが生み出す] 世界のカリキュアのレプリカにならないこと、これが私たちの脳についてなすべきことである。爆発を怖れるあまり、永遠の自己制御と、もろもろの流れ、移動、交流のままにみずからを変えていく能力とを結合した柔軟な個人であることを拒否すること。もろもろの流れをはね返し [résilient]、自己制御の監視をやわらげ、ときには爆発することを受け入れること、これが私たちの脳についてなすべきことである。」(134-135頁)

書評

「本書で彼女が展開した可塑性論も理解できるし、柔軟性に抗して可塑性を解放しようとする政治的ヴィジョンも理解可能だ。しかし、このように可塑性を論じ、それを通して政治的ヴィジョンを語るという営為が、いったいどのようなことなのか判然としないのである。」(山本貴光+吉川吉満)

による書評、『図書新聞』2005年9月10日)

「だが、心脳問題について、およびグローバリゼーションの政治についてのいくつかの鋭い明察を含んでいるにもかかわらず、最後に表れるこの脳（ニューロン）から心（人格）への移行と相互作用に関わる可塑性という問題設定はあまりに神秘的で心脳二元論の音調が強すぎるのではないだろうか。「可塑性の問い」に対して答えるためのプログラムの言明において、「脳の弁証法的思考を練り上げる」などという陳腐で貧困な哲学的決まり文句（クリーシェ）が無邪気書き付けられていることからみても、マラブーの思考の限界は明らかだろう。」（美馬達哉「可塑性とその分身」、『脳のエシックス——脳神経倫理学入門』）

7. 破壊的可塑性

『新たなる傷つきし者——フロイトから神経学へ 現代の心的外傷を考える』（*Les Nouveaux Blessés. De Freud à la neurologie, penser les traumatismes contemporains*, Bayard, 2007. 平野徹訳、河出書房新社、2016年）

『偶発事存在論——破壊的可塑性についての試論』（*Ontologie de l'accident. Essai sur la plasticité destructrice*, Léo Scheer, 2009. 鈴木智之訳、法政大学出版局、2020年）

アルツハイマー病を患った祖母を目の当たりにして構想された書。精神分析では、傷の前後での自己の心的連続性を前提とするため、アルツハイマー病は「退行」と解され、自己同一性は不変。だが、脳損傷を受けて同一性が破壊される場合、別の同一性が創造され、真新しい自己が生じる。

→現代の「新たなる傷つきし者」≠昔日の悪魔憑きや狂人、精神分析の神経症者。

脳損傷の事例だけでなく、戦争やテロ、性的虐待などの現代のさまざまな暴力にも関わる「心的外傷の一般理論」の探求。

精神分析と神経科学の総合の試み

- 1) 精神分析：性／性事象（sexualité）：心的外傷、心的出来事
- 2) 神経科学：脳／脳事象（cérébralité）：器質的な外傷、脳損傷

「現在、哲学の唯一の方途は新たな唯物論をつくり上げることにある。[...] この唯物論は、脳と思考を、脳と無意識をわずかでも引き離すことを拒絶する。」（『新たなる傷つきし者』、314頁）

「破壊的可塑性」が生み出す「偶発事の主体」

・フロイト『快原則の彼岸』における生の欲動と死の欲動、構築と崩壊の力→あくまでも前者の方が優位に置かれ、適切な弾性的均衡として解釈される。

・精神病理学における「復元性（レジリエンス）」→衝撃を被った個人や社会がいかに修復され再構成されるかを説明してくれるが、予定調和的な柔軟性に帰着。

精神分析と神経学が把握し損ねている否定的可塑性とは何か。→「快原則の彼岸」の实在を概念化する必要性。

「破壊的可塑性」：傷を受けた自己変貌に破壊者と創造者が共存している状態。自己抹殺的な変容の

後で、別の同一性ととも生き延びるとい創造的出来事が起こりうる。

性事象と脳事象の体制の根底に破壊的可塑性の存在を認めることは悲観的な態度？

→安直な救済の展望を退けて、過去を空無化された「新たな傷つきし者たち」（「偶発事の主体」）に
応答しうる新たな臨床の可能性、脳と無意識をともに考察する「新たな精神哲学」への展望。

ジャック・デリダ批判（『精神分析のとまどい』）

残酷性という喫緊の課題に対する精神分析の重要性には賛同。ただし、デリダが神経学との対話を
敬遠して、精神分析だけにその未来を期待する態度を論難。

「現代神経学の革命が、哲学の地位を脅かす「科学界におけるひとつの現象」とどまるどころか、
みずからは哲学的関心をもたないまま、偶発事故や障害についての伝統的概念体系から何も借りて
いない出来事概念を提示しえたということ。このことを脱構築がまったく考えなかったのことに
は驚くほかない……脳事象は、主体性の脱構築の達成ではないのだろうか。」（312頁）

書評

「外傷の一般理論」という仮説は、ひとつの同じ広大な「精神病理学的な風景」のもとに、心的な
障害と傷、神経変性の疾患、脳の損傷や外傷、自閉症や癲癇、さらには反復脅迫の障害、活動亢進の
症候群までをかなり性急にとりまとめていないだろうか。さらには、同様の所作で生物学的なもの
から社会的なものへと議論を拡大させているのはいささか問題含みで（少なくとも、より詳細な説
明が必要だろう）、脳障害の概念がありとあらゆる外傷——社会政治的なものであれ（虐待、戦争、
テロ、性的虐待……）、天変地変によるものであれ——に関連づけられている。」（Evelyne Grossman に
よる書評、《Rue Descartes》、2009/2、N64.）

8. 超越論的なものの可塑性

『明日の前に——後成説と合理性』（*Avant demain. Épigenèse et rationalité*, Paris, P.U.F., 2014. 平野徹
訳、人文書院、2018年）

カント哲学における「超越的なもの」：あらゆる経験に先立って、私たちの認識を可能にするもの。
経験を根拠づけるアприオリなもの。

超越論的なものの放棄

- ① ハイデガーのカント解釈：『純粹理性批判』の第一版によれば、「超越論的なもの」の本質は根源
的な時間性。生得的／後天的、アприオリ／アポステリオリの区別は二次的になる。
- ② 現代生物学のエピジェネティクス：内的状況と外的環境の相互作用によって、私たちの認知は
発生・発展する。個体における遺伝的決定と環境における選択から思考が発生・発展する。
- ③ メイヤースの思弁的实在論：超越論的なものに立脚する認識論は主観-客観の相関主義にすぎない。
相関主義の枠組みでは「祖先以前」といったものを根拠づけることはできない。

『純粋理性批判』第 27 節——超越論的なものは生得的か、獲得的か

「経験と経験の対象に関する概念とが必然的に一致すると考えられる道は二つしかない。経験がこれらの概念を可能にするか、これらの概念が経験を可能にするか、いずれかである。」

カテゴリーが経験に依存しないアプリアリな概念である以上、前者の説明はできない。

後者の説明として、「いわば純粋理性の後成説（エピジェネシス）の体系」と記すカント。

後成説：胚に諸部分が順々に付け加わることで、漸進的に自己形成する様態

≠前成説：胚はすでに完成した小型の個体であり、成長は量的な発展。

根源的に獲得されるはずの超越論的なものの変化可能性？ 後成説（生物学的な生）と超越論的なものの絡み合い。

マラブーの主張：「〈超越論的なもの〉は発生・発展し、変化し、進化する。[...] 超越論的なものは新たな生を開始する。」（9 頁）

「超越論的なものの放棄をめぐって、カントにあらがうのではなく、カントとの折衝をおこなう必要がある [...]。カントの著作そのもの、つまり彼の批判書には、超越論的なものとこれに抵抗するものとの遭遇が組み込まれている [...]。この二者の遭遇の行き先は、超越論的なものと経験的なものの分割ではなく、超越論的なものと、それなしで自己を組織化するものとの直面である。」（36 頁）

カントの「明日」に進むのではなく、「明日の前」にカントともにとどまること

『純粋理性批判』から『判断力批判』（第 65 節）への批判哲学の発生・発展

「ひとつの批判から別の批判への自己分化／自己差異化によって作動し、みずからの創造的、形成的、変形的な源泉から発して、自身の外の諸力を巻き込んで進行する内的発展、これを後成説の体系とみなすこと」（295-296 頁）

「超越論的なものと生の異質性の解消は、まさしく、カテゴリーやその対象との関係とともに進むと同時に、後成的な作用にしたがう。」（297 頁）

神経生物学的理性の批判

「哲学と生物学という二領域が対等であり、知見の相互交換をおこないうる」（339 頁）

神経生物学的な視座に欠けているのは、新しいタイプの「反省性」への理論的配慮（「批判」）。

神経的主体がみずからとどんな関係を結んでいるのか、その自己関係や自己構成の問い。

メイヤスー批判

メイヤスー：カントの相関主義は事実にすぎず、偶然的なもの。まったく別様の世界を相関主義の外に探究する必要がある。

「第三批判は、超越論的演繹を、非演繹的なものの試練にかける。よって、超越論的なもの〈事実論性〉をカントが考慮に入れていないとするメイヤスーの見解は間違っている。カントが考えているのは、まさに〈事実論性〉のみなのだ。」（314 頁）

マラブー：カントの理性の後成説は必然性のさまざまな水準を出現させて、偶然性の意味を変容させる。カントが完全に意識していた「脱相関化の可能性」（326 頁）

「したがって、ある種の現象がもつ思考を脱相関化する力を、カントは時代に先んじて発見したことになる。くり返すが、生きものは、私たち抜きできわめて精妙に自己組織化する。そして判定されることになど、まったく無関心のままである。[……] これこそメイヤサーがけっして提起することのない問題である。無関心であるものは、単独でおのずと意味をなす。」(312頁)

書評

「また批判哲学の研究についても、マラブーの試みは、『判断力批判』とりわけ「目的論的判断力の批判」を、批判哲学の核心部に据えたことになる。生命現象にかかわる第三批判が、まさに超越論的なものを解明する鍵になるという。こうした解釈は斬新で、これまで存在しないはずである。[……] しかし、『実践理性批判』で語られるように、生命は「実践的な概念」であったはずである。靈魂論の批判とともに、生命の概念は理論哲学から実践哲学へ、その居場所を変えることになった。そして、有機的存在者にかんしても、カントは「生命の類比物」と呼ぶことはあるが、生命の存在を決して認めなかったはずである。[……] この内在的な議論を考慮すれば、たとえ脱構築といえども、マラブーはテキスト上の根拠をもう少し重視すべきではなかっただろうか。」(相原博による書評、『日本カント研究』21号、127頁)

9. 女性的なものの可塑性

『差異の変換——女性的なものとして哲学的な問い』(*Changer de différence. Le féminin et la question philosophique*, Paris, Galilée, 2009.)

二つのフェミニズムの対話

- 1) 伝統的なフェミニズム：男女の二分法といった性的差異の明証性に立脚している。
- 2) ポストフェミニズム（ジェンダー研究、クイア研究）：ジェンダーの二分法を構成するイデオロギー的規範を問う。

女性なきフェミニズム：女性的なもの≠女性という今日的前提

ジェンダーの差異の多様化と存在論的差異の多様化（ハイデガー批判からフランスで展開してきた発想）は合致するのか。

文化的思考とポスト・ハイデガーの存在論的思考、アメリカの批判理論と脱構築によって再検討された存在の思考

存在論的差異と性的差異

存在者間の「同じ」差異なのか、それとも、優先ないし派生の順序があるのか。

男女の伝統的な役割が多様なアイデンティティへと移行しているが、哲学者において、女性的なものが男性的なものやトランスジェンダーを犠牲にして、一定の存在論的な特権を占めているのはなぜか。

レヴィナスの事例：女性的なものを根源的な歓待の原理、倫理的源泉とした。

「女性的なものは本当に開かれたものでありうるのだろうか、あらゆる存在様式に及んでいるのだろうか。女性的なものはつねに、ひとつの性しか特徴づけず、あるタイプの存在者、つまり「女性」しか指し示さないのではないだろうか。」(p. 17.)

存在論的差異の変換・変化

「女性的なものの存在-存在論的な帝国主義は、形而上学や男根中心主義——知られている通り、両者は結局同じものである——と対立していると信じていても、これを反復するばかりだろう。」(p. 39.)

→女性という存在者に立ち戻ることなく、女性的なものはいかにして存在を脱中性化するのか。

存在（女性的なもの）と存在者（女性）が互いに変換し合うという、存在論的差異の可塑性とは？

「問いはこうである——女性的なものあるいは女性は（〔両者の変換が問われている〕いまや〔「と」ではなく〕「あるいは」と表現することができる）、存在論的変換の無視できない様式のひとつであり続けることで、それ自体、アイデンティティが移行し代謝する場となる。それは他の場と同じく、ジェンダーの核心に記された移行状態を考えさせる。存在論的差異の核心に記された変換主義もまた、決定的にカミングアウトしなければならないのである。」(p. 49.)

→『抹消された快楽——クリトリスと思考』における、女性的なものの形象＝クリトリス

10. 脱構築の可塑性——ジャック・デリダの側道 (contre-allée / counterpath) を疾走するカトリーヌ・マラブー

デリダの遺産相続

- ・ 自伝的エクリチュールと哲学的思考の分離不可能性
- ・ フランス的なものへの懐疑、アメリカへの親近感
- ・ 生き延び *survie* の問い、生／死の問い
- ・ 起源や発生の問い

デリダとの相違、デリダへの反発

- ・ モノグラフ的な体系的読解と論述
- ・ 宗教的な問いの不在
- ・ 神経科学、脳科学との学際的研究 Cf. デリダの「領域交差 (intersection)」: 国際哲学コレージュでのセクション分類「哲学／哲学」「哲学／芸術」「哲学／政治」「哲学／科学」・・・
- ・ 否定性の問い: 弁証法の理解 Cf. 「差延は止揚および思弁的弁証法の体系との断絶点に署名しなければなりません。」(デリダ『ポジション』)
- ・ 女性性の問い

デリダ的な脱構築の手法

ある哲学者のもっとも固有なものにもっとも非固有なものを読み取り、その思考がもっとも現前するとされる地点にそのもっとも現前しない運動を読み取ることで、テキスト自体の内的破断を浮き

彫りにする手法。宙吊りとなった自己現前から示される他者への開け。

マラーの脱構築の手法：「真ん中の部屋」、隔たりの思考

弁証法と脱構築、神経科学と精神分析、哲学と生物学……ヘーゲルとマクルーハン、レヴィ＝ストロースとハイデガー、ドゥルーズとヘーゲル……本質主義フェミニズムと反本質主義フェミニズム、生き物と機械……。

相異なる思考領域を対等に付き合わせることで、問いや概念をラディカルに掘り下げ、両者が互いに脱構築する地点を指し示す手法。二つの思考領域の自己現前を互いに変貌させる隔たりの開示。脱構築は万能ではなく、可塑性の試練、形の贈与と受容と破壊に曝されねばならない。

参考：カトリーヌ・マラー日本語訳文献（論文のみ）

「暴力の経済、経済の暴力（デリダとマルクス）」、『デリダと肯定の思考』高橋哲哉・増田一夫・高桑和巳監訳、未來社、2001年。

「ジャック・デリダの死」西山雄二訳、『未来』2005年1月号、No. 460、未來社。

「可塑性への願い」桑田光平訳、『現代思想』2005年7月号（特集＝イメージ発生の科学——脳と創造性）、青土社。

「哲学の使命」中畑寛之・西山雄二訳、『未来』2005年9月号、No. 468、未來社。

「ハイデガー、資本主義の批判者——経済という隠喩の運命」千葉雅也訳、『SITE ZERO/ZERO SITE』第0号、メディア・デザイン研究所、2006年。

「「弁証法」の可能性——矛盾によって歴史はつくられてきた」、『ハーバード・ビジネス・レビュー』2007年4月号（特集：「弁証法」思考 超ロジカル・シンキング）。

「弁証法的否定性と超越論的苦痛——ハイデガー全集第六八巻におけるヘーゲルの読解」西山雄二訳、『現代思想』2007年7月臨時増刊号（特集＝ヘーゲル——『精神現象学』二〇〇年の転回）、青土社。『真ん中の部屋』に収録。

「アクシデントの主体——系譜学・脱構築・ニューロサイエンス」西山達也訳、『現代思想』2008年6月号（特集＝ニューロエシックス——脳改造の新時代）、青土社。

インタビュー「可塑性のポストヒューマンな未来——再生医療から死の欲動へ」（聞き手＝門林岳史＋西山達也）、『表象』2号（特集＝ポストヒューマン）、2008年、表象文化論学会／月曜社。

「グラマトロジーと可塑性」西山雄二訳、『思想』2014年12月号（特集＝10年後のジャック・デリダ）、岩波書店。

「屹立状態の哲学」西山雄二訳、『現代思想』2015年2月臨時増刊号（総特集＝デリダ）、青土社。

「ただひとつの生——生物学的抵抗、政治的抵抗」星野太訳、『表象』第11号、2017年。

「生物学に対する哲学的抵抗の脱構築」小原拓磨訳、『人文学報』517-15号（特集＝脱構築の現在）、東京都立大学人文科学研究科、2021年。大学ポータル「みやこ鳥」にて無料公開。

「隔離から隔離へ——ルソー、ロビンソン・クルーソー、「私」」西山雄二訳、『いま言葉で息をするために ウイルス時代の人文知』西山雄二編、勁草書房、2021年。